
魔法少女リリカルなのはStrikerS 一途な思い

czhs

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 一途な思い

【Nコード】

N0251Z

【作者名】

czhs

【あらすじ】

八神はやてが率いる新部隊その名を機動六課。この出来て二日目の部隊に異動してくる一人の魔導士がいた。これは機動六課と一人の魔導士が織り成す物語。

始まり（前書き）

初めまして『c z h s』と申します。ド素人なので温かい目で見て頂けたら幸いです。

始まり

はやて side

はやてとリインはある書類を見ていた。

「まさかあの人が来てくれるとは思ってなかったわ〜リンディさんに頼み込んだかいがあったちゅうもんや!」

「誰なんですかその人って?」

「うちやなのはちゃんそれにフェイトちゃんが前からお世話になつとる人や。ここ最近おうてへんから会うのが楽しみやわ〜」

二人が話してしるとドアをノックし二人の人物が部屋に入ってきた。

「はやてちゃん急に呼び出しなんて何かあったの?」

はやてに話しかける人物、栗色の髪をサイドポニーにして教導管の制服に身を包む管理局のエースオブエース、高町なのはだ。

「実はな今日他のところから異動してくる人がおるんよ。二人も知つとる人やから教えとこうと思つてな」

「私達も知つてる人?」

はやての言葉に首を傾げる金髪の女性。黒い執務管の制服に身を包んだフェイト・T・ハラウオンだ。

「せや、これがその人に関する書類や」

二人は書類を見ると同時に驚きと嬉しさのあまり声をあげた。

「えええええ!!!優君が来るの!?!」

「優が一緒ってことは…四人揃うのは三年ぶりだね」

「そうなんよ、はあくはやく来てくれへんかな」

優side

「ここが機動六課か…金使い過ぎだろ」

『まあ新築ですらね。それよりマスターあまり時間がありませんよ』

「そうだなありがとなアイリス」

『どういたしまして』

俺こと如月優と相棒のアイリスは六課の校舎前にいた。二日前にリンデイさんにいきなり異動させられたのだ。それも拒否権なしにな「アイツらと再び会うことになるなんてな…これもリンデイさんの策略かなんかなのか？」

『策略かどうかはわかりませんが少なくともあの人に限って悪意があつてやった事ではないと思います』

「そうだな…さてと行くか」

next

出向（前書き）

一話目です。やっぱり小説書くのって難しいですね……

出向

優side

「中に入ったはいいが部隊長室つてどこだ？」

『私に聞かれましても…』

「だよな」

こんな感じで俺達は六課の校舎内をさ迷っていた。受付の人が居なかったからまあしかたがないと思い自力で探していたんだが、一向に見つからない

「それに誰にも会わないとは…」

溜め息をついていると前から青髪とオレンジ髪の子達が歩いてきた。ちようどいいから聞いてみるか

「ちよつといいかい？」

「はい、何でしょうか？」

青髪の方が聞てくる

「部隊長室がどこにあるか教えてくれないか？」

「失礼ですが、どちら様ですか？」

今度はオレンジ髪の方が聞いてくる

「おっと名乗ってなかったな。俺は如月優一等空尉、本日から機動六課に異動して来た者だ」

「！？失礼いたしました。ティアナ＝ランスター＝二等陸士です」

「スバル＝ナカジマ＝二等陸士です」

「よろしくなティアナ、スバル」

「はい、では案内させて頂きます」

三人は部隊長室に向かった

はやて side

「優君と直接会うのは二年ぶりやな。今度どっかに連れてってもらおうかな」

「だめだよはやてちゃん、連れてってもらうのは私なんだから！」

「二人共、何言ってるの？優は私と出かけるんだよ！」

そんな事を言っているとティアナから通信がはいつた。

失礼します、如月一等空尉をお連れしました

「わかった、ありがとな」

いえ、それでは

通信が切れるとドアをノックして優君が入ってきた

「失礼します、本日より機動六課に出向します如月優一等空尉です。一年間よろしくお願いします」

「機動六課部隊長の八神はやてです。六課はあなたを歓迎します。」

お互い敬礼し握手をする

「さて、堅苦しいのはしまいや。久しぶりやね優君」

「これからよろしくね優君」

「よろしく優」

「久しぶりだなはやて、なのは、フェイト！」

n e x t

思い（前書き）

三話目です。そういえば主人公の容姿について書いてなかったよ
うな……

思い

優達は軽く挨拶をした後、今後の事について話し合っていた。

「俺は何をすればいいんだ？」

「優君にはなのはちゃんとフェイトちゃんの補佐役かつ六課の副部隊長をしてもらうつもりや」

「つまり三人の付き人ってことなるのか？」

「まあそんな感じじゃ！」

話を聞き終わると優は少し俯き考えこんでいた。

地上本部からの呼び出しもあるからな…どうしよう…

その姿を見てなのはは恐る恐る尋ねた

「優君、私達と一緒にじゃいや？」

聞いてくるなのはの方を見ると少し目を潤ませ上目遣いでいた。よく見ればフェイトとはやても同じようにしている

「いやな訳ないだろ！ただ地上本部からも呼び出しがあるから四六時中一緒にはいられないぞ」

それを聞くと三人の顔がいつきに明るくなった。

「もちろんそのつもりや。仕事内容は個別に聞いてな「了解」じゃあ六課全員をホールに集めとるから挨拶しに行こか！」

「その前一つだけ言わせてくれ。三人とも…無理はするなよ」

「優（君）……」

「まあそれだけだ。はやくしないと置いてくぞ？」

「あ、うんって待ってよ優君」

四人は部隊長室をあとにする

(マスター…あの事言わなくて良かったんですか?)

(無駄な心配をかけたくないからな…それにできるならこの事は知られないほうがいい。俺にとってもあいつらにとってもな)

俺がやる事は一つ、あいつらを守る…ただそれだけだ……

n e x t

模擬戦 前（前書き）

四話目です。

とりあえずあと一話かいたら主人公設定を書きたいと思います。

模擬戦 前

俺は今柱の後ろに隠れている。何故かというとはやてに隠れてると言われたからだ。本人曰く皆を驚かせたいらしい

「皆忙しい中集まってくれてありがとな。集まってもらったんは今日から六課に出向する人を紹介するためや。それじゃ優君おねがい」

言われて出てみるとロングアーチ陣が「えええええ！？」と言いたそうな表情をしている。スバルとティアナは一度会っているからかそれほど驚いていない

「わざわざ集まって頂きありがとうございます。今日から機動六課に出向となりました、如月優一等空尉です。立場は副部隊長となりますが気軽に接して下さい。一年間よろしくお願いします」

「あの如月さんってもしかしてあの有名な『銀髪の断罪者』さんなんですか？」

リインが質問した瞬間、優の放つ空気が変わった。殺気を放つようにして…

「そう呼ばれることもあるができるだけその名で呼ばないでくれ…」

静まりかえる部屋内。その沈黙を破ったのは部隊長であるはやてだった

「ま、まあとりあえず自己紹介はこれぐらいにして、各自仕事に戻るか!」

優side

はあくやっちまったな〜無意識だったとはいえ初見であればいよなくこれからどうしよう……

そんな事を考えているとなのはとフェイトが話しかけてきた。多分さっきの事についてだろう。

「優君さっきはどうしたの?いつもの優君らしくなかったよ?」

「悪い、無意識のうちにあんな事になってた。ほんとにらしくないよな……」

「抱え込んだじゃだめだよ?何か悩み事があるならいつでも相談にのるから!」

「ああ、ありがとな二人とも。だけど大丈夫だよ」

「「うう／＼」」

そう言つて二人の頭を撫でる。二人共、顔を少し紅く染め恥ずかしそうに俯く。ちなみに頭を撫でるのは昔からの癖だ。

「さてとそろそろフォワード陣の訓練の時間だ、はやく行かないとな!」

「「うん!」」

そうやって三人は訓練所に向かった。優にこの後降りかかる不幸のことなんて知るはずもなく…

n
e
x
t

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0251z/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 一途な思い

2011年12月5日23時49分発行